大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

万葉集の「鳴く鳥」：「鳴く鳥」を歌うことの意味について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-09-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 朴, 喜淑 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005055

万葉集の「鳴く鳥」
――「鳴く鳥」を歌うことの意味について――

朴　喜淑

一　はじめに

万葉集には鳥が歌われる歌が約五五〇首存在する。[1] そのうち鳥が鳴くことについて歌われているものが三四六首あり、それらの歌々は次の三種に大別できよう。

（A）

世の常に　聞けば苦しき　呼子鳥　声なつかしき　時には
なりぬ　（8・一四四七）[2]

なにしかも　ここだく恋ふる　ほととぎす　鳴く声聞けば
恋こそ増され　（8・一四七五）

（B）

卯の花も　いまだ咲かねば　ほととぎす　佐保の山辺に
来鳴きとよもす　（8・一四七七）

朝霞　たなびく野辺に　あしひきの　山ほととぎす　いつ
か来鳴かむ　（10・一九四〇）

（C）

春霞　流るるなへに　青柳の　枝くひ持ちて　うぐひす鳴
くも　（10・一八二二）

朝霧の　八重山越えて　ほととぎす　卯の花辺から　鳴き
て越え来ぬ　（10・一九四五）

（A）は、鳥の声に対して、聞くと苦しいけれども懐かしい（一四四七）、恋しさが増すのに恋しい（一四七五）と、鳥の声への愛着が表現に現われる形で歌われる類である。

（B）は、例年より早くやってきて鳴くホトトギスに対する喜び（一四七七）や、早くやって来て鳴いてほしいという気持ち（一九四〇）を読み取ることは可能だが、（A）のように「恋ふ」、「なつかし」といった心情を直接的に表わす表現の用いられていない歌々である。

また、（C）は、題詞に「鳥を詠む」[3] とあるもので、「うぐひす鳴くも」（一八二二）の詠嘆の「も」や、「八重山越えて～鳴き

て越え来ぬ」（一九四五）の表現には、ようやく（来て）鳴いてくれた喜び、鳥の声を聞いた喜びがこもってはいるものの、「鳥を詠む」という詠物の題詞を持つため、その感覚は（A）、（B）よりは、希薄といえよう。

さて、この「鳥を詠む」の題詞を持つ歌は、「雁を詠む」、「霍公鳥を詠む」など「（鳥名）を詠む」を含めて七十六首[4]あるが、これらの歌々の多く（六十一首）は、次に挙げるように、

鳥を詠む

佐保川に　さををどる千鳥　夜くたちて　汝が声聞けば　寝ねかてなくに　（7・一一二四）

梅の花　咲ける岡辺に　家居れば　ともしくもあらず　うぐひすの声　（10・一八二〇）

朝ぬでに　来鳴くかほ鳥　汝だにも　君に恋ふれや　時終へず鳴く　（10・一八二三）

梓弓　春山近く　家居らば　継ぎて聞くらむ　うぐひすの声　（10・一八二九）

旅にして　妻恋すらし　ほととぎす　神奈備山に　さ夜ふけて鳴く　（10・一九三八）

「鳴く鳥」（「鳥の声」、「鳥の音」なども含む―以下「鳴く鳥」と記す）を歌うものである。一方、鳥そのものが歌の主題となって歌われているものは、

秋風に　大和へ越ゆる　雁がねは　いや遠ざかる　雲隠りつつ　（10・二一二八）

の一首のみと思われ、[5]ここから万葉歌における鳥の歌は「鳴く鳥」に偏向することが看取できる。集中の「鳴く鳥」は、恋歌において用いられたり、また、声そのものが喜びの対象となって歌われているといってもよい。この点において清水克彦氏（「情と景―情景歌とその周辺―」『万葉』第六十五号・一九六七年／『万葉論集』所収）の、

言う迄もなく、『万葉集』は抒情詩の集であるから、景の表現は、いわば情の表現の為に、或いはむしろ情の表現として、誕生したものと考えられる。そして、景の表現が成長し、ついには、一見情の表現に対置さるべき独立の世界を形成するに到ったとしても、それが抒情詩である限り、そこにはなんらかの情がある筈であり、情と景とは、情を基盤とした或る有機的な関連を保つ事によって、抒情詩としての統一をもたらしている筈である。

との指摘は示唆に富んでいるといえよう。集中の「鳴く鳥」と話者の感情の重なりを分離することはできまい。

また、万葉集の「鳴く鳥」について注目した先行研究に内藤

明氏（『万葉集』に鳴く鳥」『音の万葉集（高岡万葉歴史館論集5）』二〇〇二年）がある。内藤論文は、鳥の鳴き声を「時間・季節の表徴としての鳥の声」、「空間をつなぐ鳥の声」などの機能的な面から分類し、鳥の「音」の果たしている役割や意味、表現のありようを検討している。本稿ではこうした先行研究を受けつつ、集中の「鳴く鳥」の歌の分析を通じて「鳴く鳥」を歌うことの意味を考察する。

二　「鳴く鳥」と形容詞がかかわる歌

冒頭に述べたように集中には「鳴く鳥」の歌が三四六首ある。これらの歌を分析するにあたっては、話者が「鳴く鳥」に対して、どのような判断・評価を加えているかを知るため、「鳴く鳥」と形容詞が共起する歌を対象に進めていくことにする。(6)

「鳴く鳥」と形容詞が共起している例は一二〇例（一一二首）ある。うち「鳴く鳥」と形容詞がかかわっている例は九十四例（八十八首）であり、その九十四例の形容詞の種類は次の表の通りである。以下羅列的になるが、順に見ていきたい。

形容詞の種類		例数
なし	間なし	7
	時なし	4
	すべなし	3
	心なし	2
	日なし	2
	潟なし	1
	所なし	1
寒し		9
なつかし		7
恋し		5
惜し		5
痛し		5
良し		5
めづらし		4
近し		4
遠し		4
悲し (7)		3
遥けし		3
ともし		3
さぶし		3
苦し		3
うれたし		2
かなし		1
繁し		1
安し		1
ねたし		1
いちしろし		1
多し		1
著し		1
まだし		1
早し		1

右の表を見ると、現象的には「間なし」、「時なし」、「すべなし」、「心なし」などの「なし」が最も多いため、これらの用例から見ていく。まず、「間なし」と「時なし」が用いられている例(8)を見る。

①うち渡す　竹田の原に　鳴く鶴の　間なく時なし　我が恋ふらくは　（4・七六〇）

②～天の下　知らしまさむと　八百万　千年をかねて　定めけむ　奈良の都は　かぎろひの　春にしなれば　春日山　三笠の野辺に　桜花　木の暗隠り　かほ鳥は　間なくしば鳴く　露霜の　秋さり来れば　生駒山　飛火が岡に　萩の枝を　しがらみ散らし　さ雄鹿は　つま呼びとよむ　山見れば　山も見が欲し～　（6・一〇四七）

③ほととぎす　厭ふ時なし　あやめ草　縵にせむ日　こゆ鳴き渡れ　（10・一九五五（四〇三五に重出））

④〜慰むる　こともあらむと　里人の　我に告ぐらく　山辺には　桜花散り　かほ鳥の　間なくしば鳴く　春の野に　すみれを摘むと〜　（17・三九七三）

これらの歌の中の「鳴く鳥」は、絶え間ない恋を起こす序（①）、都のありうべき景（②）や春の野の景（④）、いつ聞いても厭う時がない（③）ものとして歌われている。これに対して、「心なし」が用いられている次の歌では、

大和恋ひ　眠の寝らえぬに　心なく　この州崎回に　鶴鳴くべしや　（1・七一）

心なき　鳥にそありける　ほととぎす　物思ふ時に　鳴くべきものか　（15・三七八四）

のように、鳴くホトトギスに対して「心なき鳥」と、あたかも恨んでいるかのように歌っている。ところが、次に掲げる、

ひとり居て　物思ふ夕に　ほととぎす　こゆ鳴き渡る　心しあるらし　（8・一四七六）

の歌は、先ほどの二首とは逆に「心あり」との評価を下している。一人で妹を恋い慕って沈んでいる時に鳴く鳥に対して、一方では「心なし」と歌い、片方では「心あり」と歌っているのである。『増訂全註釈』はこの歌（一四七六）に対して、

霍公鳥の声が物思いを催すというのが、常型であるのに、慰めるというのが変っている。中臣宅守の、「心無き鳥にぞありける霍公鳥もの思ふ時に鳴くべきものか」（巻十五、三七八四）と全然反対なのがおもしろい。

と評しているが、「心なし」にしても、「心あり」にしても結局二首は同じことを歌っているのではなかろうか。つまり、鳥の声、ホトトギスの声を聞くと恋しさが増すので辛いと歌っているのが三七八四歌の「心なし」であり、それでもなお聞きたいという三七八四歌の延長上にある感情を歌っているのが一四七六歌の「心あり」と考えられるからである。次の「すべなし」が用いられている例には、こうした「心あり」、「心なし」の両方の感覚がよく表われている。

物思ふと　寝ねぬ朝明に　ほととぎす　鳴きてさ渡る　すべなきまでに　（10・一九六〇）

妹があたり　繁き雁がね　夕霧に　来鳴きて過ぎぬ　すべなきまでに　（9・一七〇二）

ほととぎす　間しまし置け　汝が鳴けば　我が思ふ心　いたもすべなし　（15・三七八五）

物思い、妹への思いをしている時に鳴き渡る鳥は、恋心をかき立てるものとなる。それは辛いものである一方、己の気持ち、恋心を分かってくれる、慰めにもなるのであり、だから辛い一

方において聞きたいものなのであろう。

更に、「鳴く鳥」と「痛し」、「苦し」とがかかわっている例[9]の中にも、

神奈備の　磐瀬の社の　呼子鳥　いたくな鳴きそ　我が恋増さる　（8・一四一九）

ほととぎす　いたくな鳴きそ　一人居て　眠の寝らえぬに聞けば苦しも　（8・一四八四）

と歌うものがある。禁止の表現「～な～そ」が用いられ、恋しさが増す原因が鳥の鳴き声にあることを強調しているのであるが、「鳴くな」ではなく「いたくな鳴きそ」と表現しており、鳴き声が完全に消えてしまうことを期待していないので、この二首にも鳥の鳴き声を聞くと恋しさが増して辛いけれども、なお聞きたいという感覚が歌われているといえよう。[10]その鳥の鳴き声は、

佐保渡り　我家の上に　鳴く鳥の　声なつかしき　愛しき妻の児　（4・六六三）

秋山の　したひが下に　鳴く鳥の　声だに聞かば　何か嘆かむ　（10・二二三九）

と歌われ、妹、愛する相手の声に比喩されるものでもあった。そして、恋情を募らせる契機となり、そうした募る恋情を鳥に向って「心あり」、「心なし」と表現したのであり、それは募る恋へ向う己の心情の二面性がともに鳥の声に託された結果といってよいだろう。

また、「鳴く鳥」と「なし」がかかわっている例には、次のようなものもある。

①若の浦に　潮満ち来れば　潟をなみ　葦辺をさして　鶴鳴き渡る　（6・九一九）

②橘は　常花にもが　ほととぎす　住むと来鳴かば　聞かぬ日なけむ　（17・三九〇九）

③あしひきの　山辺に居れば　ほととぎす　木の間立ち潜き　鳴かぬ日はなし　（17・三九一一）

④川渚にも　雪は降れれし　宮の内に　千鳥鳴くらし　居む所なみ　（19・四二八八）

鳴く鳥の声はいつまでも聞きたい（②、③）ものとして歌われている。一方、①、④では、ミ語法をもって鳥が鳴く原因を表わしているが、九一九歌（①）の「潟をなみ」については多くの注釈書が「潟がないので」と解釈しているのに対して、『新編全集』は「鶴が潟を無がって、と解することも可能」と頭注をつけている。「鶴が潟を無がって～鳴き渡る」と解釈する場合「潟をなみ」の判断主体は鳥になるわけだが、こうした歌い方は「惜し」、「良し」の例[11]にもある。

「惜し」

梅の花　散らまく惜しみ　我が園の　竹の林に　うぐひす鳴くも　（5・八二四）

藤波の　散らまく惜しみ　ほととぎす　今城の岡を　鳴きて越ゆなり　（10・一九四四）

「良し」

我が背子が　やどの橘　花を良み　鳴くほととぎす　見にそ我が来し　（8・一四八三）

さ雄鹿の　妻問ふ時に　月を良み　雁が音聞こゆ　今し来らしも　（10・二一三一）

これらの歌は花が散るのを惜しんで鳴き、花や月の素晴しさに起因して鳴くなど、鳥が鳴く原因がミ語法で表わされ、鳥が判断主体になっていると了解される。鳥の判断というのはいうまでもなく話者の判断と等価ではあるが、話者の判断を鳥の判断のように委ねることにより、話者の感情が鳥と共有される結果となっている。

感情共有という点においては「心あり」[12]、「心なし」も同じである。鳥の鳴き声を聞いて辛くなり、それがまた慰めになるのも、結局、虚構ではあるものの、「鳴く鳥」に話者の感情が託されているからである。

「なし」の次に多いのは「寒し」[13]である。

①秋田刈る　仮廬もいまだ　壊たねば　雁が音寒し　霜も置きぬがに　（8・一五五六）

②雲の上に　鳴きつる雁の　寒きなへ　萩の下葉は　もみちぬるかも　（8・一五七五）

③今朝鳴きて　行きし雁が音　寒みかも　この野の浅茅色付きにける　（8・一五七八）

④我が背子は　待てど来まさず　雁が音も　とよみて寒し　ぬばたまの　夜もふけにけり　さ夜ふくと　あらしの吹けば　立ち待つに　我が衣手に　置く霜も　氷にさえ渡り　降る雪も　凍り渡りぬ　今更に　君来まさめや～　（13・三二八一）

⑤葦の葉に　夕霧立ちて　鴨が音の　寒き夕し　汝をば偲はむ　（14・三五七〇）

「寒し」とかかわって詠まれている鳥は、雁と鴨の渡り鳥に限られる。秋になって飛来する鳥、という認識が前提にあって、秋の訪れと結び付けてその声を「寒し」と表現したのであろうが、この点については考える必要があろう。たとえば、次の、

今朝の朝明　雁が音聞きつ　春日山　もみちにけらし　我が心痛し　（8・一五一三）

の歌では、雁の声に「痛し」という感情を起こしているが、[14]それは雁の声に自分の感情が託されているからである。「寒し」の例もこれと同じであり、④と⑤にはそうした感覚が表われているといえよう。

このように考えると、「悲し」の例も同様のことがいえるだろう。

①つとに行く　雁の鳴く音は　我がごとく　物思へかも　声の悲しき　（10・二一三七）

②〜鶴がねの　悲しく鳴けば　遙々に　家を思ひ出　負ひ征矢の　そよと鳴るまで　嘆きつるかも　（20・四三九八）

③海原に　霞たなびき　鶴が音の　悲しき夕は　国辺し思ほゆ　（20・四三九九）

鳥の声そのものは悲しいはずがないのに、自分と同じく物思いをするからであろうと想像したり（①）、妻のことを思い出したり（②、③）するのである。鳥の声には感情が託されやすかったといえる。

次に多いのは「なつかし」[15]である。

①佐保渡り　我家の上に　鳴く鳥の　声なつかしき　愛しき妻の児　（4・六六三）

②ほととぎす　夜声なつかし　網ささば　花は過ぐとも　離れずか鳴かむ　（17・三九一七）

③我が門ゆ　鳴き過ぎ渡る　ほととぎす　いやなつかしく聞けど飽き足らず　（19・四一七六）

鳥の声を聞くことによって妻の声のなつかしさが連想され、妻への思慕の情を寄せている（①）。鳥の声は妻の声に比喩されるほど愛すべきものだったのであり、だからこそ網で捕まえてでも続けて聞きたい（②）、聞いても飽きることがない（③）と歌うのである。「鳴く鳥」は「なつかし」の他に「恋し」、「めづらし」、「ともし」、「さふし」、「良し」、「かなし」とかかわって、[16]

「恋し」

島伝ひ　敏馬の崎を　漕ぎ廻れば　大和恋しく　鶴さはに鳴く　（3・三八九）

古よ　しのひにければ　ほととぎす　鳴く声聞きて　恋しきものを　（18・四一一九）

「めづらし」

暁に　名告り鳴くなる　ほととぎす　いやめづらしく　思ほゆるかも　（18・四〇八四）

〜卯の花の　咲く月立てば　めづらしく　鳴くほととぎす　あやめ草　玉貫くまでに　昼暮らし　夜渡し聞けど　聞く

ごとに　心つごきて　うち嘆き　あはれの鳥と　言はぬ時なし　（18・四〇八九）

「ともし」

誰聞きつ　こゆ鳴き渡る　雁がねの　妻呼ぶ声の　ともしくもあるを　（8・一五六二）

梅の花　咲ける岡辺に　家居れば　ともしくもあらず　うぐひすの声　（10・一八二〇）

「さぶし」

我が背子が　国へましなば　ほととぎす　鳴かむ五月は　さぶしけむかも　（17・三九九六）

我のみに　聞けばさぶしも　ほととぎす　丹生の山辺に　い行き鳴かにも　（19・四一七八）

「良し」

うぐひすの　卵の中に　ほととぎす　ひとり生まれて　己が父に　似ては鳴かず　己が母に　似ては鳴かず　卵の花の　咲きたる野辺ゆ　飛び翔り　来鳴きとよもし　橘の花を居散らし　ひねもすに　鳴けど聞き良し　賂はせむ　遠くな行きそ　我がやどの　花橘に　住み渡れ鳥　（9・一七五五）

「かなし」

～百鳥の　来居て鳴く声　春されば　聞きのかなしも　いづれをか　別きてしのはむ　卵の花の　咲く月立てば　めづらしく　鳴くほととぎす～　（18・四〇八九）

と歌われているが、そのありようは「なつかし」の例とさほどかわらない。「鳴く鳥」は「なつかし」、「恋し」、「めづらし」、「ともし」、「さぶし」、「良し」、「かなし」などの表現が用いられるほど慕わしく思われ待たれたのであり、いくら聞いても飽き足りることなく、一人で聞けばさびしいものだったのである。

更に、「鳴く鳥」は「近し」ともかかわって歌われている。

①～高知らす　布当の宮は　川近み　瀬の音ぞ清き　山近み　鳥が音とよむ　秋されば　山もとどろに　さ雄鹿は　つま呼びとよめ　～　（6・一〇五〇）

②今朝の朝明　秋風寒し　遠つ人　雁が来鳴かむ　時近みかも　（17・三九四七）

③あしひきの　山も近きを　ほととぎす　月立つまでに　なにか来鳴かぬ　（17・三九八三）

④ほととぎす　ここに近くを　来鳴きてよ　過ぎなむ後に　験あらめやも　（20・四四三八）

季節の変化と雁の飛来を結びつけて歌っているのが②である。また、山が近いということは、鳥の声が聞けるということでも

あった（①、③）。この点は次の歌からも分かる。

あしひきの　山辺に居れば　ほととぎす　木の間立ち潜き
鳴かぬ日はなし　（17・三九一一）

④はこうした考え方が前提にあって詠まれたものである。

そして、この「近し」に近似しているのが「繁し」の例である。

鹿脊の山　木立を繁み　朝去らず　来鳴きとよもす　うぐひすの声　（6・一〇五七）

ここには山の木立が茂っていて、そこに来て鳴く鳥が歌われている。山が近ければと歌う例と同様、木立が茂っていてそこに来て鳴く鳥の声を聞く喜びが歌われている。

一方、右の「近し」とは逆に、「遠し」が用いられている例もある。

①狛山に　鳴くほととぎす　泉川　渡りを遠み　ここに通はず　一に云ふ「渡り遠みか　通はざるらむ」　（6・一〇五八）

②雲の上に　鳴くなる雁の　遠けども　君に逢はむと　たもとほり来つ　（8・一五七四）

③昨夜こそは　児ろとさ寝しか　雲の上ゆ　鳴き行く鶴の間遠く思ほゆ　（14・三五二二）

④ぬばたまの　月に向かひて　ほととぎす　鳴く音遙けし
里遠みかも　（17・三九八八）

①は、泉川の辺りに住む人の作であり、狛山のホトトギスが詠まれ、結句の「ここに通はず」には「ここまで鳴いて来ればよいに」（『全釈』）という、狛山に近ければよいのにという意がこもっている。また、雲の上を鳴き渡る雁と鶴が序となって、「遠けども　君に逢はむと　たもとほり来つ」（②）、「間遠く思ほゆ」（③）の句を導いているが、その中には④のように近いことへの願望がこもっており、それが「遠し」によって強調されている。

「遠し」と意味の近いものに「遥けし」があるが、近いことへの願望を歌っている点においては「遠し」と等しい。

夏山の　木末のしげに　ほととぎす　鳴きとよむなる　声の遙けさ　（8・一四九四）

今夜の　おほつかなきに　ほととぎす　鳴くなる声の　音の遙けさ　（10・一九五二）

ぬばたまの　月に向かひて　ほととぎす　鳴く音遙けし
里遠みかも　（17・三九八八）

この三首は、ホトトギスの鳴き声が遥かに遠いと歌っているが、そこには近ければという意が内包されている。「鳴く鳥」は

近いところにあってほしいものだったのである。

「鳴く鳥」はこの他にも、

年のはに　来鳴くもの故　ほととぎす　聞けばしのはく
逢はぬ日を多み　（19・四一六八）

〜夕されば　藤の繁みに　はろはろに　鳴くほととぎす
我がやどの　植ゑ木橘　花に散る　時をまだしみ　来鳴か
なく　そこは恨みず　然れども　谷片付きて　家居せる
君が聞きつつ　告げなくも憂し　（19・四二〇七）

うちなびく　春とも著く　うぐひすは　植ゑ木の木間を
鳴き渡らなむ　（20・四四九五）

と、「多し」、「まだし」、「著し」とかかわって歌われているが、[17]歌い方は今まで見てきた歌々とほぼ同じであり、懐かしくて待たれるもの、喜ばれるものとして詠まれている。

ところで、鳴く鳥、ホトトギスに対して「うれたし」と表現している歌がある。

〜まそ鏡　清き月夜に　ただ一目　見するまでには　散り
こすな　ゆめと言ひつつ　ここだくも　我が守るものを
うれたきや　醜ほととぎす　暁の　うら悲しきに　追へど
追へど　なほし来鳴きて　いたづらに　地に散らさば〜
（8・一五〇七）

恋歌において「鳴く鳥」は、絶え間ない恋の比喩であったり、その声は聞くと恋しさが増さる辛いものであるけれども聞きたいものとなって歌われているのに、ここでは「うれたきや　醜ほととぎす〜追へど追へど　なほし来鳴きて」と歌っている。その理由は妹に見せたい橘の花を地面に散らすからである。橘の花とホトトギスといえば、

ほととぎす　来居も鳴かぬか　我がやどの　花橘の　地に
散らむ見む　（10・一九五四）

橘の　林を植ゑむ　ほととぎす　常に冬まで　住み渡る
がね　（10・一九五八）

橘の　花散る里に　通ひなば　山ほととぎす　とよもさむ
かも　（10・一九七八）

〜我がやどの　植ゑ木橘　花に散る　時をまだしみ　来鳴
かなく　そこは恨みず　然れども　谷片付きて　家居せる
君が聞きつつ　告げなくも憂し　（19・四二〇七）

と歌われるのが常であり、当該歌については、

霍公鳥を罵倒しているのがおもしろい（『増訂全註釈』）。
花を愛する人に見せたいあまり、時鳥を罵倒するあたりは
家持の気負いが見られる（『集成』）。
時鳥を非難しているのが面白い（『全注』）。

と評されているように例外とするしかあるまい。また、

うれたきや　醜ほととぎす　今こそば　声の涸るがに　来鳴きとよめめ　（10・一九五一）

の歌は、一五〇七歌と同じく「うれたし」が用いられているが、その内容は正反対である。来て鳴かないホトトギスに怒りを覚えるほど、「鳴く鳥」は待ち焦がれるものであったのである。やはり、一五〇七歌は例外というしかない。

また、「ねたし」の例にも、

ほととぎす　いとねたけくは　橘の　花散る時に　来鳴きとよむる　（18・四〇九二）

とあるが、これについては『窪田評釈』が

霍公鳥は、橘の花の散る感傷的なさまを、無関心らしく来鳴きとよもしている。その無関心なさまが嫉ましいといっているのである。しかしこの嫉ましさは、堪えられる程度までの～中略～霍公鳥の良さを讃える気分を、逆説的に、屈折を持っていっているものである。

と述べているように、「橘とほととぎすとの取り合わせがしっくりしないので言」（『新編全集』）っているだけである。

以上、「鳴く鳥」と形容詞がかかわって歌われる全例（注に記した用例を含む）を見てきた。「鳴く鳥」の歌は、季節の変化や都のありうべき景を歌うものもあったが、「鳴く鳥」そのものを歌うものと、恋情を歌うものに大別できた。このように見てくると、集中の「鳴く鳥」は、待たれるもの、恋心が託されるものとして位置づけられているといえるが、そこには話者の感情が「鳴く鳥」に託されているという共通項を見出すことができる。では、「鳴く鳥」が喚起するものは何なのであろうか。この点について論じるため、「鳴く鳥」に「聞け（か）ば」、「鳴け（か）ば」などの条件句[18]が用いられている歌を見てみたい。

三　「鳴く鳥」に「聞け(か)ば」、「鳴け(か)ば」などの条件句が用いられている歌

「鳴く鳥」に「聞け（か）ば」、「鳴け（か）ば」などの条件句が用いられている歌は二十七首ある。[19]次に掲げる歌はその中の一部である。

（Ⅰ）

①近江の海　夕波千鳥　汝が鳴けば　心もしのに　古へ思ほゆ　（3・二六六）

②佐保川に　さをどる千鳥　夜くたちて　汝が声聞けば　寝ねかてなくに　（7・一一二四）

③ほととぎす　なかる国にも　行きてしか　その鳴く声を

聞けば苦しも　（8・一四六七）

④あしひきの　山ほととぎす　汝が鳴けば　家なる妹し　常に偲はゆ　（8・一四六九）

⑤なにしかも　ここだく恋ふる　ほととぎす　鳴く声聞けば　恋こそ増され　（8・一四七五）

⑥～あらたまの　月日も来経ぬ　雁がねも　継ぎて来鳴けば　たらちねの　母も妻らも　朝露に　裳の裾ひづち　夕霧に　衣手濡れて　幸くしも　あるらむごとく　出で見つつ　待つらむものを　世間の　人の嘆きは　相思はぬ　君にあれやも～　（15・三六九一）

（Ⅱ）

⑦藤波は　咲きて散りにき　卯の花は　今そ盛りと　あしひきの　山にも野にも　ほととぎす　鳴きしとよめば　うちなびく　心もしのに　そこをしも　うら恋しみと　思ふどち　馬打ち群れて　携はり　出で立ち見れば～　（17・三九九三）

⑧多胡の崎　木の暗茂に　ほととぎす　来鳴きとよめば　はだ恋ひめやも　（18・四〇五一）

⑨年のはに　来鳴くもの故　ほととぎす　聞けばしのはく　逢はぬ日を多み　（19・四一六八）

⑩～谷辺には　椿花咲き　うら悲し　春し過ぐれば　ほととぎす　いやしき鳴きぬ　ひとりのみ　聞けばさぶしも　君と我と　隔てて恋ふる～　（19・四一七七）

⑪春過ぎて　夏来向かへば　あしひきの　山呼びとよめ　さ夜中に　鳴くほととぎす　初声を　聞けばなつかし　あやめ草　花橘を　貫き交じへ　かづらくまでに　里とよめ　鳴き渡れども　なほし偲はゆ　（19・四一八〇）

（Ⅰ）は、鳥の声を聞き、それを契機として別の何かを思い出す、思われると歌うもの（十三首）[20]であり、（Ⅱ）は、鳥の声を聞き、それによる心の動きを歌うもの（十二首）[21]である。

まず、鳥の声を契機として何かを思い出す（Ⅰ）であるが、中には「思ひ出づ」や「思ほゆ」のことばが用いられず「偲はゆ」④のことばが用いられ、家にいる妻のことに思いをはせる例もある。また、「汝が声聞けば　寝ねかてなくに」②、「鳴く声聞けば　恋こそ増され」⑤のように歌われる例もあるが、これらの例は恋の対象を思い出すという点において④の類例といえよう。更に、⑥も、雁が来て鳴くことから、その雁のように君も無事であって帰って来るだろう、と思われたのであり、鳥の声が契機となっているという点において右の歌々と同様である。

一方、①は千鳥の声を聞いて思い出されるものが古へとなっている。また、③は「中国の蜀の望帝が山中に隠棲し、その霊魂が時鳥となったという蜀魂の故事」（『全注』）を踏まえれば過去を想起することであり、①の類例となる。「鳴く鳥」を契機として想起されるものは、過去（①、③）と恋愛対象（②、④、⑤、⑥）の二種に限られる。

鳥はただ来て鳴くにすぎない。にもかかわらず鳥が鳴き、それを聞いて妹や愛する人、過去を思い出す、思われるというのはどういうことであろうか。次の、

飫宇の海の　河原の千鳥　汝が鳴けば　我が佐保川の　思ほゆらくに　（3・三七一）

大和には　鳴きてか来らむ　ほととぎす　汝が鳴くごとに　なき人思ほゆ　（10・一九五六）

ほととぎす　間しまし置け　汝が鳴けば　我が思ふ心　いたもすべなし　（15・三七八五）

の歌では、鳥に対して「汝」と呼びかけているが、こうした例は①、②、④にもあった。「鳴く鳥」は話者と感情共有が可能な存在として位置づけられているのである。だからこそ、

〜鶴がねの　悲しく鳴けば　遙々に　家を思ひ出　負ひ征矢の　そよと鳴るまで　嘆きつるかも　（20・四三九八）

のように鶴が悲しく鳴くと捉えることができたのであり、また、

世の常に　聞けば苦しき　呼子鳥　声なつかしき　時には　なりぬ　（8・一四四七）

のように、聞くと苦しいけれども聞きたいと歌ったのである。こうして見ると、鳥の声によって何かを思い出すというのは、話者の心と鳥とが一体化し、その声に話者の感情が託された結果であろう。それはあくまでも話者の幻想、鳥に対する話者の感情共有の幻想にすぎない。しかし、それでもなおその感情共有を表出するのは、鳥に対する無前提の信頼基盤を想定すべきだろう。

続いて鳥の鳴き声を聞くことによる心の動きを詠んだ歌々（Ⅱ）を見てみる。これらは「聞け（か）ば」、「鳴け（か）ば」などの条件句の後に「恋し」（⑦）、「恋ふ」（⑧）、「しのぶ」（⑨）、「さぶし」（⑩）、「なつかし」（⑪）など、ある特定の感情を表わすことばが用いられている例である。まず、「恋し」の例を追ってみよう。

集中の「恋し」は、山や浜などの場所、花などの自然の景物などもその対象となるが、[2]

朝夕に　見む時さへや　我妹子が　見とも見ぬごと　なほ恋しけむ　（4・七四五）

もみち葉の　過ぎかてぬ児を　人妻と　見つつやあらむ
恋しきものを　（10・二二九七）

今のごと　恋しく君が　思ほえば　いかにかもせむ　する
すべのなさ　（19・三九二八）

のように、基本的に恋愛感情の表出であり、対象との一体感を希求する表現であることはいうまでもない。妹や君に一体感を求めるように、「鳴く鳥」にも一体感を求めたのであるが、「鳴く鳥」に一体感を求めることは、

五月山　卯の花月夜　ほととぎす　聞けども飽かず　また
鳴かぬかも　（10・一九五三）

～木の暗の　四月し立てば　夜隠りに　鳴くほととぎす
古ゆ　語り継ぎつる　うぐひすの　現し真子かも　あやめ
草　花橘を　娘子らが　玉貫くまでに　あかねさす　昼は
しめらに　あしひきの　八つ峰飛び越え　ぬばたまの　夜
はすがらに　暁の　月に向かひて　行き帰り　鳴きとよむ
れど　なにか飽き足らむ　（19・四一六六）

我が門ゆ　鳴き過ぎ渡る　ほととぎす　いやなつかしく
聞けど飽き足らず　（19・四一七六）

ほととぎす　聞けども飽かず　網取りに　取りてなつけな
離れず鳴くがね　（19・四一八二）

と歌われているように、鳥の声を聞きたいという、鳥の声に対する願望であった。しかし、その願望は聞いたからといって満たされるものではなかった。（Ⅱ）の歌々は、こうした鳥の声に対する尽きることのない願望の表われといえよう。鳥の声は、聞けば聞くほどますます聞きたくなるものだったのである。

以上で、条件句を持つ「鳴く鳥」の歌の大半を見てきたが、[23]「鳥を詠む」の題詞を持つ例については別に考える必要があろう。

ほととぎす　花橘の　枝に居て　鳴きとよもせば　花は散
りつつ　（10・一九五〇）

この歌は「鳥を詠む」という題詞の規制をうけるため、詠物のようにも見える。しかし、『全注』が「鳴くほととぎすと橘の花の散りこぼれる光景がいかにも好ましい一幅の絵のような叙景として作者を満足させている」と述べているように、話者の感情、満足感を読み取るべきであろう。橘の花が散っているのは、ホトトギスが鳴きとよもすからである。そして、それによって鳴くホトトギスと「橘の花の散りこぼれる光景」を同時に味わうことができたのである。下句の「鳴きとよもせば　花は散りつつ」の表現には、ホトトギスが鳴くと、同時に橘の散る光景も味わえるので、

卯の花の　共にし鳴けば　ほととぎす　いやめづらしも

名告り鳴くなへ　（18・四〇九一）

に通底する感覚が歌われているのだろう。花とともに鳴く鳥は喜びをもたらしたのである。また、ホトトギスと散る橘の花は、

ほととぎす　来居も鳴かぬか　我がやどの　花橘の　地に散らむ見む　（10・一九五四）

橘の　花散る里に　通ひなば　山ほととぎす　とよもさむかも　（10・一九七八）

～我がやどの　植ゑ木橘　花に散る　時をまだしみ　来鳴かなく　そこは恨みず　然れども　谷片付きて　家居せる君が聞きつつ　告げなくも憂し　（19・四二〇七）

と歌われており、一九五〇歌は鳴くホトトギスと「橘の花の散りこぼれる光景」を同時に味わうことへの喜びを歌ったものとみるべきである。一九五〇歌には特定の感情を表わすことばは用いられていないが、（Ⅱ）の類と考えてよいだろう。

以上、「鳴く鳥」に「聞け（か）ば」、「鳴け（か）ば」などの条件句が用いられている歌を見てきたが、「鳴く鳥」は、感情共有の可能なその声が聞きたい、という願望を喚起するといえよう。

集中の「鳴く鳥」は聞きたいものであった。ところで、その願望を否定するような例がある。続いて詳しく見ていく。

四　泣血哀慟歌の鳴く鳥

柿本人麻呂の泣血哀慟歌には、

～沖つ藻の　なびきし妹は　もみち葉の　過ぎて去ゆくと玉梓の　使ひの言へば　梓弓　音に聞きて（注略）言はむすべ　せむすべ知らに　音のみを　聞きてありえねば　我が恋ふる　千重の一重も　慰もる　心もありやと　我妹子が　止まず出で見し　軽の市に　我が立ち聞けば　玉だすき　畝傍の山に　鳴く鳥の　声も聞こえず　玉梓の　道行く人も　一人だに　似てし行かねば　すべをなみ　妹が名呼びて　袖そ振りつる（注略）　（2・二〇七）

と、「聞けば～聞こえず」と歌われる。この句については、「畝傍の山に」という瞩目の景が叙せられる。近いといっても、鳥の声までは聞こえて来ない。亡妻の声も聞こえて来ない（『新大系』）。

畝傍山は軽の里から二キロも離れているから鳥の声は聞こえないというのは事実であろう。しかし、ここではそうした現実を歌っているのみではない。「軽の市に　吾が立ち聞けば」から必然的に想像されるところの妻の声そのものも「音も聞こえず」によって否定的に印象される点に、こ

くべしや　（1・七一）

誰聞きつ　こゆ鳴き渡る　雁がねの　妻呼ぶ声の　ともしくもあるを　（8・一五六二）

梅の花　咲ける岡辺に　家居れば　ともしくもあらず　うぐひすの声　（10・一八二〇）

我が門ゆ　鳴き過ぎ渡る　ほととぎす　いやなつかしく　聞けど飽き足らず　（19・四一七六）

の歌の中の鳥は、それぞれの類としての鶴、雁、うぐひす、ホトトギスでさえあればよい。これに対し当該歌では、亡くなった妻に比喩される特定の一羽の鳥の声が求められているのではなかろうか。

泣血哀慟歌の作品世界において、鳥は鳴いていても鳴いていなくてもかまわない。鳴いたとしてもそれはその特定の一羽の鳥の声（妻の声）ではない。鳥の声は鳥の声でしかなく、妻の声とはなり得ないのである。「鳴く鳥の　声も聞こえず」は、妻が亡くなったことを認めるしかない、亡くなった妻の声への話者のあきらめの表現といってよかろう。

鳥の鳴き声を「聞こえず」と歌う例は当該歌の他に、

谷近く　家は居れども　木高くて　里はあれども　ほととぎす　いまだ来鳴かず　鳴く声を　聞かまく欲りと　朝に

の連合表現の効果が認められ、遠いからこそ聞こえぬ声に耳を傾けて聞こうとする主体の悲しみも伝えられるものと思う（『全注』）。

畝傍山に鳴いている鳥の声も聞こえないように妻の声も聞こえず（『和歌大系』）。

などと指摘されるように、鳥の声が妻の声の比喩であることはいうまでもないだろう。鳥の声を愛する相手の声に比喩した例は、巻十の人麻呂歌集所出歌にも、

秋山の　したひが下に　鳴く鳥の　声だに聞かば　何か嘆かむ　（10・二二三九）

がある。しかし、「鳴く鳥の　声も聞こえず」を『全注』がいうように、「遠いからこそ聞こえぬ声に耳を傾けて聞こうとする主体の悲しみ」と捉えてよいだろうか。つまり、当該歌の「声も聞こえず」は、遠いから聞こえない鳥の声を聞こうとするものではなく、聞きたい鳥の声（妻の声）を話者自らが拒絶せざるを得ない、いわばあきらめの表現なのではなかろうか。この点について考えるため、これまで見てきた「鳴く鳥」の歌々をあらためて見る必要があろう。これまでの歌々に詠まれている鳥は、種としての鳥である。たとえば、

大和恋ひ　眠の寝らえぬに　心なく　この州崎回に　鶴鳴

は　門に出で立ち　夕には　谷を見渡し　恋ふれども　一声だにも　いまだ聞こえず　（19・四二〇九）

と一例のみ存する。しかし、『窪田評釈』が「家持の怨みに対して弁解しているだけで、それ以上は一歩も出ていないものである」と述べているように、鳥の声そのものが聞きたいのに、まだ来て鳴かないと歌うものである。

また、「（鳥の）声だに聞かず」の例はこちらも一例ながら存在する。

～春花の　咲ける盛りに　思ふどち　手折りかざさず　春の野の　繁み飛び潜く　うぐひすの　声だに聞かず　娘子らが　春菜摘ますと　紅の　赤裳の裾の　春雨に　にほひひづちて　通ふらむ　時の盛りを　いたづらに　過ぐし遣りつれ～　（17・三九六九）

この歌は病苦の家持が、健康時とは違っていたずらに春を過ごしてしまったことを詠んだもので、普段ならば春の野に出かけてうぐひすの鳴き声を聞いたのに、という意をこめたものであり、当該歌と同一に論じられないことはいうまでもない。

このように見てくると、泣血哀慟歌の「鳴く鳥」に対する表現が、これまで見てきた歌々とは異質であることが分かる。これまでの歌々は、感情共有可能な鳥の声を聞きたいと歌うものであった。しかし、泣血哀慟歌では、鳥の声は聞こえてもそれは妻を想起させるものにはならず、それは妻との感情共有が不可能になってしまったことを示している。

泣血哀慟歌に亡くなった妻を求める表現は、「聞けば～鳴く鳥の　声も聞こえず」の他、「道行く人も　一人だに　似てし行かねば」がある。「人も」は「声も」と並列するものであり、妻の声と妻の姿という、聴覚と視覚によって妻そのものが求められているのである。しかし、妻を追い求めてもそれは否定されるしかなかった。「聞けば～鳴く鳥の　声も聞こえず」、「道行く人も　一人だに　似てし行かねば」は、妻の死を確認していない話者が妻を追い求める表現である一方、妻の死を認めざるを得ない、あきらめの表現でもあったのである。

泣血哀慟歌の「鳴く鳥の　声も聞こえず」についての従来の研究は、つきつめていえば序詞か実景かという問題に帰着するものであった。そして、「声も聞こえず」を、近いといっても聞えない、遠いから聞こえない、といった距離と結び付けて解釈されるのが一般的であった。しかし、「格別に厳密な有機的構造体を構成する」[24]泣血哀慟歌の「鳴く鳥の　声も聞こえず」は、つづく「道行く人も　一人だに　似てし行かねば」とあいまって、聴覚と視覚によるあきらめの表現として一首内において機

能していたといえよう。

五　むすび

以上、集中の「鳴く鳥」の歌を見てきたが、泣血哀慟歌の例は他の歌々と一線を画すものであった。ただ一羽の鳥が妻の声の譬喩とされ、その声の聞こえないことを歌い、それは感情共有が不可能になってしまったことへの嘆きであった。泣血哀慟歌がこれまでの研究史の中で、作品として高い評価を受けている一端を見る思いがする。

集中の「鳴く鳥」は、話者と感情共有の可能な存在、待たれる存在として位置づけられ、その声を聞きたいとされるものであった。たとえば、「鳴く鳥」が恋歌に多く用いられているのは、話者の恋心が「鳴く鳥」と共有されやすいからである。泣血哀慟歌とて、こうした共通理解の基盤が存在するからこそ、その裏返しの形で妻の声の譬喩とできたのであろう。

集中における「鳴く鳥」は、基本的に感情共有の可能な、無前提の信頼を置ける存在であった。だからこそ「心あり」、「心なし」という正反対の評価も、その声への願望となり得たのであろう。

【注】

(1) 「たづがなし」（15・三六二六）などの数え方によって多少増減する。

(2) 歌の引用は、『万葉集電子総索引（CD・ROM）』（二〇〇九年）による。ただし、一部私に改めた箇所がある。また、注釈書名は通行の略称を用いた。

(3) 一八一九歌の題詞に「鳥を詠む」とあり、この題詞は一八三一歌までの十三首に及ぶ。また、一九三七歌の題詞に「鳥を詠む」とあり、この題詞は一九六三歌までの二十七首に及ぶ。

(4) 七十六首の内訳は、以下の通り。

・鳥を詠む　一一二二～一一二四、一八一九～一八三一、一九三七～一九六三、二一六六～二一六七

・右二首、鳥を詠む（左注）一二五一～一二五二

・雁を詠む　二一二八～二一四〇

・雹公鳥を詠む　一七五五～一七五六、三九〇九～三九一〇

・山部宿禰赤人、春鶯を詠む歌一首　三九一五

・八日に、白き大鷹を詠む歌一首并せて短歌　四一五四～四一五五

・雹公鳥と時の花とを詠む歌一首并せて短歌　四一六六～四一六八

・雹公鳥を詠む歌二首　四一七五～四一七六

・雹公鳥と藤の花とを詠む一首并せて短歌　四一九二～四一九三

・雹公鳥を詠む歌一首　四二三九

・雹公鳥を詠む歌一首　四三〇五

(5) 残る十四首は、何らかの形で鳥と話者の感情が重なっているものである。

(6) 本来であれば三四六首すべてを考察対象とすべきであるが、全体を対象としても結論は大きく違わない。

(7) 「悲しい」と「いとしい」の二つの意味がある「かなし」は、「悲し」と「かなし」に別立てした。

(8) この他に「間なし」が四例（三七二、一八九八、三〇八七、三〇八八）、「時なし」が二例（七六〇、三〇八八）あるが、歌い方はかわらない。以下全例を掲げることはせず、典型的なものや多少問題のある例を中心に触れる。

(9) この他、「苦し」の二例（一四四七、一四六七）に、鳥の鳴き声を聞くと恋しさが増して辛いけれども、なお聞きたいという感覚が歌われている。また、「痛し」の例は他に三例（一四六五、一五一三、二八〇三）あるが、これらは鳥の声に対する愛着を歌うもの（一四六五）、雁の声に自分の感情（「痛し」）が託されているもの（一五一三）、鶏の高い鳴き声を人目を忍ぶ隠り妻と対比させて歌うもの（二八〇三）である。

(10) 「良し」、「早し」の例に、

織女の　袖つぐ夕の　暁は　川瀬の鶴は　鳴かずとも
よし
朝鳥　早くな鳴きそ　我が背子が　朝明の姿　見れば悲しも
（8・一五四五）

と歌うものがある。この二首は「鳴く鳥」に対して鳴かなくてもよい（一五四五）、早くに鳴くな（三〇九五）と歌っているが、近似する例が『古事記』や集中にも、

～嬢女の　寝すや板戸を　押そぶらひ　我が立たせれば
～さ野つ鳥　雉は響む　庭つ鳥　鶏は鳴く　心痛くも
鳴くなる鳥か　此の鳥も　打ち止めこせね～　（記二）
暁と　夜鳥鳴けど　この山上の　木末が上は　いまだ静
（12・三〇九五）

けし
遠妻と　手枕交へて　寝たる夜は　鶴がねな鳴き　明け
ば明けぬとも　（10・二〇二一）
暁と　鶏は鳴くなり　よしゑやし　一人寝る夜は　明け
ば明けぬとも　（11・二八〇〇）
明けぬべく　千鳥しば鳴く　白たへの　君が手枕　いま
だ飽かなくに　（11・二八〇七）
こもりくの　泊瀬の国に　さよばひに　我が来れば　た
な曇り　雪は降り来　さ曇り　雨は降り来　野つ鳥　雉
はとよむ　家つ鳥　かけも鳴く　さ夜は明け　この夜は
明けぬ　入りてかつ寝む　この戸開かせ（13・三三一〇）
我が門に　千鳥しば鳴く　起きよ起きよ　我が一夜夫
人に知らゆな　（16・三八七三）

と見え、「鳴く鳥」が共寝をした男女に別れの時を知らせるものとして一般的であったことが分かる。

(11) 鳥が判断主体になっている例は他に、「惜し」に三例（八四二、一四九一、一九五七）、「良し」に一例（一九四三）ある。

(12) 「鳴く鳥」に対して「心あり」と歌う例は他に、

我がやどに　月おし照れり　ほととぎす　心あれ今夜
来鳴きとよもせ　（8・一四八〇）
ほととぎす　夜鳴きをしつつ　我が背子を　安眠な寝し
め　ゆめ心あれ　（19・四一七九）

と二例ある。この二首は恋歌ではないが、（来て）鳴いてほしいと思う気持ちを「心あれ」と表現しており、話者の感情が託されている点においてはかわらない。

(13) 「寒し」は他に四例（一五四〇、二一八一、二二〇八、二二二二）あるが、歌い方は同じである。

(14) 一五一三歌については『新大系』が、「雁声や黄葉に悲哀を起こすこと、万葉集には珍しい。中国文学の「悲秋」の気分の影響があるのではないか」と述べている。

(15) 「なつかし」は他に四例（一〇五九、一四四七、四一八〇、四一八一）あるが、歌い方はかわらない。

(16) この他に、「恋し」三例（八三四、三九八七、三九九三）、「めづらし」二例（四〇九一、四一六六）、「ともし」一例（一四六八）、「さぶし」一例（四一七七）がある。

(17) 「鳴く鳥」は、「安し」、「いちしろし」ともかかわって、

篠の上に　来居て鳴く鳥　目を安み　人妻故に　我恋ひにけり　（12・三〇九三）

杉の野に　さ躍る雉　いちしろく　音にしも鳴かむ　隠り妻かも　（19・四一四八）

と歌われている。三〇九三歌は、上二句が第三句の「目を安み」を起こす序であり、鳴く鳥が人妻を連想させていることは間違いないが、『新編全集』が「見目麗しいので」と解釈しながら、「小鳥の見た目の良さからかけたか。かかり方未詳」とするように、第三句の「目を安み」の意味がはっきりとしない。また、四一四八歌は、「妻を求めてけたたましく鳴く雉を、恋に堪えきれず泣く隠り妻になぞらえて」（『集成』）いる可能性が高い。しかし、「隠した妻（雌雉）がいるのだろか、それならなおのこと思いは表に出してはいけないのにと咎める気持であろう」（『新大系』）、「雉の忍び逢う声を聞いて、人の場合でいえば激しく恋い泣く忍び妻のそれとは大違いだ、というような意味か」（『新編全集』）など、多様な解釈が可能であり、この二首については判断を保留した。

(18) 「鳴く鳥」に「ごとに」が用いられている歌が二例（「ほととぎす　汝が鳴くごとに」（一九五六）、「鳴くほととぎす　聞くごとに」（四〇八九））あるが、意味上「聞けば」、「鳴け（か）ば」などの条件句が用いられている歌とかわらないと思われるため、この二首も含めて論を進める。ただし、この二首を除外しても行論に支障はない。

(19) 「鳴く鳥」に条件句が用いられている歌は、以下の通り（ただし、聞くことの結果として鳥の声が聴覚に入ってくると歌う例（一〇六二）は対象から除外した）。

二六六、三七一、一一二四、一四四七、一四六七、一四六九、一四七五、一四八四、一九五〇、一九五六、二二三九、三三五二、三六九一、三七八五、三九〇九、三九一四、三九九三、四〇五一、四〇八九、四〇九一、四一六八、四一七二、四一七七、四一七八、四一八〇、四一八一、四三九八、計二十七首。

(20) (Ⅰ)の用例は、以下の通り。

二六六、三七一、一一二四、一四四七、一四六七、一四六九、一四七五、一四八四、一九五六、二二三九、三六九一、三七八五、四三九八、計十三首。

(21) (Ⅱ)の用例は、以下の通り。

一九五〇、三九〇九、三九一四、三九九三、四〇五一、四〇八九、四〇九一、四一六八、四一七七、四一七八、四一八〇、四一八一、計十二首。

(22) 集中の「恋し」（「恋」、「恋ふ」を含め八二六例）の対象

- 君や妹などの人―七八〇例
- 花や鳥・鳥の声などの自然の景物―二十九例
- 吉野・玉島・竜田山のような土地―十三例
- 古へ―三例
- 老婆の「強ひ語り」―一例

(23) 「鳴く鳥」に「聞け（か）ば」、「鳴け（か）ば」などの条件句が用いられている歌の中には、

信濃なる　すがの荒野に　ほととぎす　鳴く声聞けば
時過ぎにけり　（14・三三五二）

ほととぎす　来鳴きとよめば　草取らむ　花橘を　やどには植ゑずて　（19・四一七二）

と歌う例もある。三三五二歌は、初句「信濃なる」と結句「時過ぎにけり」の解釈に問題がある。まず、初句「信濃なる」については、

須賀の荒野に住んでいる庶民の歌。〜中略〜山の雪の消え方、渡り鳥などで、農作の時期を知るのは、庶民には普通のことで、これもそれと思われる（『窪田評釈』、『私注』、『新大系』）。

かような国名を冠しているのは、他国の人がいうのであって、その他の人ならば、かような国名などを冠しない（『増訂全註釈』、『全釈』）。

の二つに分かれている。また、結句「時過ぎにけり」については、

帰るべき時期の遅れたのに驚いたもの（『全釈』）。

恋人と逢うべき時期（『古義』）。

時鳥が鳴く初夏は農繁期なので夫が待たれるのであろう（『窪田評釈』、『集成』、『新考』、『新大系』）。

トキスグはほととぎすの鳴く声を写した語（『新編全集』）。

のように解釈が割れており未だ定説をみない。そして、四一七二歌は、「花橘に時鳥を待つようなことをせず、野外の仕事にいそしみながら、その声を聞こうという歌か」（『集成』）と述べており、他の諸注釈書も「草取らむ　花橘を　やどには植ゑずて」の句について不明としている。二首に関しては解釈の問題もあり判断を保留したい。

(24) 伊藤博氏（「歌俳優の哀歓」『上代文学』第十九号・一九六六年／『万葉集の歌人と作品上』所収）

（パク　ヒスク・本学大学院博士後期課程在学）